

<奨励賞 7団体>

■ 特定非営利活動法人 きのくに子どもNPO (和歌山)

団体概要	和歌山西子ども劇場として、1984年に設立。会員制の団体として、生の舞台・芸術や、子ども達が自ら作り出す活動を通して、子ども達の成長をサポートしてきた。すべての子どもに対して、豊かな生活体験・芸術体験を提供することで、子どもの発達・成長をサポートしていきたいと、2007年に名称をきのくに子どもNPOと変更し、法人格を取得。子どもの遊び・体験や子育てサポート事業を行っている。
事業概要	本事業では、子育て当事者の母親をエンパワメントし、「お互いに助け合う」仲間作りを援助するために、参加者が抱えている悩みや関心をグループで話し合い、自分にあった子育ての仕方を学ぶワークショップである「ノーバディ・パーフェクト(NP)プログラム」を実施するものである。あわせて、母親や自助グループを支援できる子育てサポーターを養成し、当事者と支援者の双方を育てる事業とする。
講評	子育て支援の必要性は浸透する一方で、当事者である母親がお客さんになってしまい、地域のサークルは近年減少、母親同士の仲間づくりは困難になっている。本事業では、子育て期間全体を通じて励ましあう仲間づくりを目指して、NPプログラムという手法を取り入れていること、支援者も養成することが特徴的である。団体が行っているつどいの広場事業との連携によって事業の効果が期待でき、事業の組み立て方と実現性、将来的な継続・発展性が高く評価された。

■ 特定非営利活動法人 キンダーフィルムフェスト・きょうと (京都)

団体概要	文学・美術・音楽・演劇・文化を含んだ総合芸術、言語・国境を越える視聴覚芸術と呼ばれる映画を通して、子ども達がメディア・リテラシー(映画・映像を読み取り、表現、描く能力)を身につけて異文化理解を深め、社会参画の機会の拡充を図るとともに、豊かな成長と生活文化環境の向上に寄与することを目的に、1994年から京都国際子ども映画祭を続けている。
事業概要	本事業は、子どものメディア・リテラシー教育と異文化理解などを身につける機会として、世界の子どもを描いた作品を上映する「第14回京都国際子ども映画祭」を開催するものである。子どもが司会・オープニング映像制作・ゲストインタビュー等の運営をスタッフとして活動すると共に、公募の子ども審査委員が、グランプリを選出し講評まで行うなど、地域も年齢も違う子ども達が相互理解と思いやりのコミュニケーション能力を養う場とする活動を実施する。
講評	本事業は、映画祭によって、子どもが他国の文化・歴史の違いや同じ点など、社会に全体に向ける目を持ち、自身が体験しながらそのテーマを感じ取れる貴重な機会を創るものである。これまでの長年に渡り開催してきた映画祭の継続性とあわせて、子どもの運営への参画や、大学などの地域資源の連携など総合的な活動が評価された。

■ 特定非営利活動法人 NPO子どもネットワークセンター天気村 (滋賀)

団体概要	1987年に、子どもを取り巻く環境について考え直そうと、子ども、大人、障がいをもつ、もたないに関係なく、子ども達の周辺に起きている問題解決に色々な方面から関わる任意団体として設立された。地域の教育NPOとして、子ども達がおかれている状況を地域と一緒に考える場をつくり、実体験や地域交流を通して、生きた教育を実践、地域社会の様々な環境の改善・整備に取り組んでいる。
事業概要	本事業は、約150年前の古民家を拠点に、年間を通じた体験プログラム「昔暮らし体験」を企画・実施するものである。子どもや親が、農業体験・食育体験を通して自身の生活スタイルの問い直しや日常生活では得られない体験を、体感として積み重ねながら、少しずつ日常の生活に反映するきっかけづくりを目指す。
講評	地域資源である古民家を核にした本事業は、子ども達が身近な自然や地元住民とふれあい、自らが住まう地域を「心のふるさと」として、大切に育むことにもつながるものである。事業の実現性や創意工夫とあわせて、農業支援者や漁業組合など地域の多様な層との連携が高く評価された。今後は、古民家を通じて高齢者を含む多くの世代が関わり、地域の新しい文化交流の場として存在感を発揮して欲しい。

■ 大地の会 (大阪市在住地域活動栄養士の会) (大阪)

団体概要	大阪府栄養士会・地域活動部会の交流会で“大阪市内で地域活動をしている栄養士の相互の情報交換の場を”との声があがり、有志で1998年に自主活動グループが立ち上がった。食に関する情報の氾濫や、ライフスタイルの変化の中、栄養学を基礎にした正しい『食』の情報を提供し、『食べること』を地域の人と一緒に考え、楽しく実践する様々な活動に取り組んでいる。
事業概要	本事業は、栄養士の専門性と地域の社会資源の連携を活かして、食育をテーマに、乳幼児親子から学童児に向けて、食の面での親・子の両面支援となる講座を行うものである。だれもが気軽に立ち寄れる地域の交流スペース「みなくるハウス」で、家庭と同様のキッチンを活用して乳幼児と保護者に向けての「みなくる食育講座」、子ども自身が学ぶことを目的にした少人数制の調理実習「からだにやさしいクッキング講座」の二つを、一貫した子育て支援として実施する。
講評	多様化する食を取り巻く環境において、子どもの食育は現代の大きな課題である。多くのアプローチが試行錯誤されている中、本事業は食の専門家である栄養士が、地域においてそのスキルを活かし、創意工夫が極め細やかに成されている点が評価された。専門家集団による子育て支援事業の実施は、大阪などの都心部では増えてきているが、全体的に見てまだ少なく、他の地域への波及を期待したい。また、規模は大きくない団体が、自らのネットワークで地域に展開している小さくても大切な事業に光を当てることは、本アワードの主旨に適うものであるといえる。

■ 特定非営利活動法人 NPOぱれっと（大阪）

団体概要	1998年に任意団体として子育て支援事業を開始し、2003年に会社法人として2・3・4歳児の就園前保育を事業化した。2006年度に高槻市つどいの広場事業の公募に伴って、会社法人と並列で、NPO法人格を取得し、つどいのひろば事業「ぱれっと広場」を開設する。現在は、会社法人の収益事業とともに、NPO法人としてより地域のニーズに沿った事業を展開する。
事業概要	本事業は、2007年度より当団体が、地域の障がいを持つ子ども達を対象に活動している「ボーダレス・アートくらぶ」をより充実発展させ、参加者の子ども達以外に、中高生のアートボランティアを呼びかけ交流を作り出していくものである。活動内容によって、絵画や造形を楽しめる「アトリエくれよん」、さをり織りができる「おりおりくらぶ」、音楽療法を取り入れて音と遊ぶ「おととつと音スタジオ」と、3つのコースがあり、障がいのある子もない子も、一人ひとりの個性を大切に自由に表現する場を目指している。
講評	自閉症の子どもを持つ親からのニーズで始まった本事業は、障がいを持つ子どもを取り巻く社会ニーズを的確に捉えたものである。障がいのある・なしに関わらず共にふれあい・交流する場所を地域に作り出し、そこに中高生が参画することは、単なる表現活動に留まらず、人間関係づくりにも大きな意義がある。今後は、団体の主要な事業であるつどいの広場事業とも、関連性を深め、相互が有機的につながる事業展開を期待したい。

■ 特定非営利活動法人 東灘地域助け合いネットワーク（兵庫）

団体概要	震災ボランティアとして1995年に設立、神戸市東灘区全域にわたり横断的な復興支援・コミュニティ活動を行う。1999年から、空き店舗が増えた御影旨水館に活動拠点を移し、その後、介護保険外の高齢者自立支援やデイサービス、阪神御影駅前自転車駐輪場の指定管理者など、まちづくりに関わる多角的な事業を展開する。昨年からは、地域での子育てを応援するために子育て支援事業も取り組んでいる。
事業概要	当団体のこれまでの子育て支援の中で、母親の自主活動「まちの子育て広場・カウママ」が誕生し、商店街の中で、親子や地域住民が集う交流会やイベントを開催するようになった。本事業では、「まちの子育て広場・カウママ」が親の自主活動を軸にしながら、将来に渡って引き継がれ、地域ぐるみの活動に広がるように、当団体の各種事業とリンクさせながら、実践的な支援を行うものである。
講評	当団体のような高齢者支援・まちづくりで高い実績のある団体が、母親の自主活動を応援することに、地域資源の活用・ネットワークの面から高く評価された。さらに、子どもの成長と共に退会者が出る子育て支援事業において、地域住民と団体事務局が次期担い手を育てる手法など、事業の継続性にも独自の創意工夫がみられる。新商業施設が開設するなど、厳しい商店街の環境の中で、まちの活性化にも寄与する事業となること期待したい。

■ 特定非営利活動法人 ポニーの里をつくろう会 (奈良)

団体概要	乗馬セラピーを普及するために自主的な市民が集まり、馬を通じて障がい者も健常者も、子どもも高齢者も共に生きるノーマライゼーション社会を目指そうと 1995 年に会を発足した。1997 年に 65 回に及ぶボランティアの手作りの活動で牧場が完成し、ふれあい乗馬センターとして乗馬セラピーを実施している。また、自立支援法に基づく居宅介護、児童デイサービス事業、高齢者の介護事業なども展開する。
事業概要	当団体は障がい者がいつでも乗れる乗馬センターがあるため、本事業では、この施設をうまく活用して障がい児のための自然体験スクールを四季に応じた体験プログラムとして提供し、あわせて、指導者を養成するものである。自然とのかかわりや人とのふれあい、日ごろ経験できない野外での活動を通じて、ハンディを持つ子ども達の可能性やチャレンジ精神を培い、生きる力を育むことを目指している。
講評	地域での障がい児に対する、自然とのふれあいや野外での活動の場は少なく、活動範囲は制限されがちであり、受け入れる人材の育成も急務である。本事業は、社会ニーズを顕在化し、地域住民によって作られた乗馬センターという資源を活かした事業設計が評価された。今後は、本事業で育成するサポーターが力を発揮し、単なる体験プログラムとして終わらせない展開を期待したい。

(50音順)